



豊橋市美術博物館友の会だより

-2013年-春号 **Vol.85**
FU風伯HAKU
Spring 2013

特集「アートとは何か」鑑賞講座③

3年前に没後400年の「長谷川等伯展」を観た。80点ほどの作品の最後に国宝《松林図屏風》があった。結局この一枚を遺すために彼の人生はあったのか、と思わせる衝撃をその絵は与えてくれた。消えてしまった命に絵が泣いているとしか思えない。中村正義の《うしろの人》を収蔵庫で初めて観た衝撃もそれに匹敵する。消えて行くとする命への悲しみ。彼は何者だったのか。

中村正義とわたし

笹木繁男(現代美術資料センター主宰)

問：まず、笹木さんが絵画に関心を持たれるようになったのは、いつごろ、どういうきっかけからですか？

笹木：私が絵に関わりを持つようになったのは小学校の高学年の頃、長男として出征中の父に代わって、家の仏事や祝いの席に使う絵画を選別する担当をさせられ、季節を考え薄暗い蔵から運び出し展示する作業のなかで、作品鑑賞を楽しむ喜びを身に着けていったように思います。ですからわたしのスタートは日本画です。浜田台兒の《冠鶴》(1962年作、61.0×83.0)は、1962年5月に開催された、三溪洞の「第一回白水会」への出品作です。次に求めたのもやはり日本画、片岡球子の《富士山》で1965年頃の話です。

問：中村正義には、どういういきさつで興味を持たれたのですか？

笹木：当時中村正義は、私には近寄りたがたい遠い存在の日本画家でした。それがいつの頃か、東京湯島の羽黒洞の取り扱い作家として身近に作品に接せられるようになり、日展脱退後は、羽黒洞主催の展覧会を欠かさず見ることとなります。羽黒洞の木村東介は私の



左:笹木繁男氏 右:大野主任学芸員

父の中学同級生でした。1974年「第1回从展」初日、会場入口に昂然と立つ正義と出会い、私が正義の背後の《うしろの人》について感想を述べましたら、大きく頷かれたのを今でも鮮明に思い出します。当時正義の作品は高値の花で、版画を手に入れるのがやっとでした。

正義が亡くなって30回忌が迫ったある日、ある画廊に立ち寄りましたら、私の正義好きを知っていた主人に正義の風景画を見てみないかと声を掛けられます。

渋る私に、変わった絵だからと、強く勧められるまま拝見したのが《建築中の家》でした。その木の香も漂うような、清爽なただずまいに、正義の生への祈願が感じられ、直ちに購入を決めます。その作品調査の過程で、私は正義の日展時代をほと



んど知らなかったのを自覚させられます。私の著書『ドキュメント 時代と刺し違えた画家 中村正義の生涯』は、こうして始まった私の中村正義研究の成果をまとめたものです。

問：正義の画風は、振幅が激しく時代によって全く違って、同じ作家が描いたと思えないようなところがあります。つまり、「絵画の一貫性の欠如」について以前よく指摘されましたが、どうお考えですか？

笹木：正義の絵の本質を考える上でも大切な問題が没後に起こる。それをここで話しておきます。1977年の4月16日正義は亡くなり、1980年にその没後展を神奈川県立近代美術館と豊橋市美術館共催で企画されますが、神奈川県立近代美術館の土方定一館長の反対で挫折します。

仲立ちした針生一郎によると「一貫性や持続性が見られず会場が持たない」と言われ、土方のオーソドックスな判断に反論できず引き下がったと語る。これをどう考えるか。

一般的に画家はそれぞれ独自のスタイルを作り、それを深化させて画風を形成する。山本丘人風、高山辰雄風などそれをさします。それから外れると土方、針生の発言となり、画家は孤立します。正義の場合は上記と対照的に自己改革の過程で新しい自己を発見して表現するタイプで、外面的に絶えず自己変革を遂げた作家ですが、内面的には、強固なほどに一貫性を保持した作家です。正義の風景、静物、舞妓、顔などに一貫して背後に正義が潜んでいます。私は正義の作品の全てが自画像だと断定します。見事な一貫性です。

土方も針生も絵の一面（表面）のみを見ています。ご承知のように、絵に厚みのない、内面のない、表面だけの絵は、見る人に共感、感動を与えることができません。きれいだ、うまい、だけの絵画となります。

同様に戦争画の

解釈でも、表面性のみで、早飲みこみをして、反戦画だの、最高の傑作などと評価をする人がいます。

また、具体美術の作家にも、具体の活動期間の16年（注・18年は創立から解散まで、活動は16年です）の仕事を生涯にわたり描き続け、見事な一貫性で高い評価を受けている作家がいます。そうした意味で、白髪や元永、田中よりも、上前智祐、松谷武判、堀尾貞治を私は評価します。個人的には、具体美術後の作品のない人は認めません。

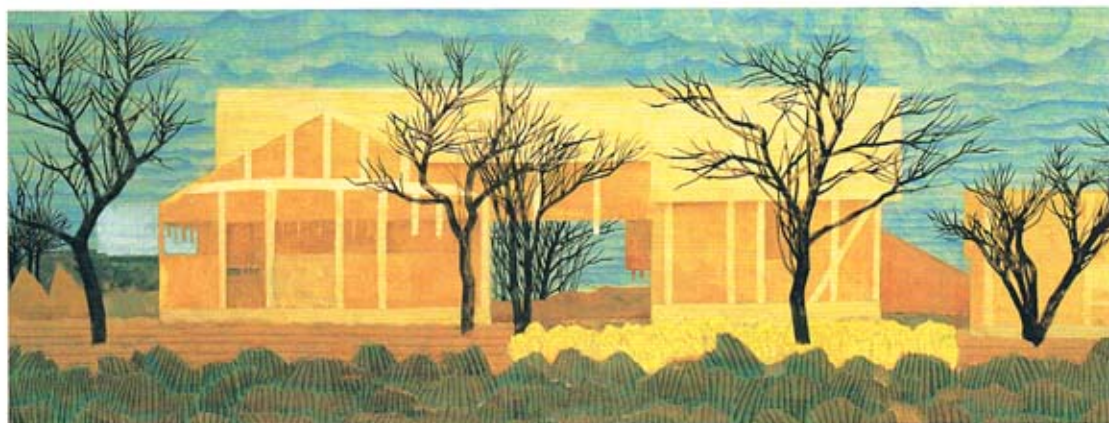
問：笹木さんは、正義が描く風景画に大変興味があると聞いています。それはどんなところでしょうか？

笹木：従来正義の風景画は、顔のシリーズに比して軽く見られています。正義の自嘲的な発言に惑わされた面もあります。私があの本を書きあげて初めて風景画の重要性に気がつき愕然としました。

正義の画業を振りかえると、人物画が大半を占め、風景や静物画はそれに比し、わずかです。ところが、正義はこの数少ない風景画に特別な思いを抱いたふしがあります。それは、ここ一番という勝負の時の絵画が、すべて風景画であったことでした。

院展・日展の初入選や、初特選をねらった作品全てが、風景画（《風景》[名古屋美術館所蔵]、《斜陽》、《爽涼》、《夕陽》）であり、また1960年の日本橋・高島屋での東京初個展出品の作品11点中、風景画は9点、静物画・人物画は各1点のみです。ここにも彼の風景画を誇示する姿勢がうかがえます。また正義が物議をかもした「五都連合展」の問題作は、以下のようにすべて風景画に起因するものでありました。

第一に、日展離脱後の1962年に、五都展でおこした



《建築中の家》1957年 中村正義の美術館寄託

正義の画風変貌騒ぎも、日展時代のセピアの風景画が要因です。

第二に、1966年に出品作の撤去騒動を起こした、正義初のコラージュ作品も《風景》です。

第三に、1969年に、五都展を手玉に市場人気をあおって勝負し、作品価格を高騰させて、その年の高値10傑入りを果たしたのも、また《雪景色》と題した風景画です。

またこの年、画家生命を賭けて、銀座・三越で開催した「太陽と月のシリーズ」と題する個展作品は、日本画には前例のない、エアスプレーや型紙を使用した、鮮烈で透明感にあふれた風景画で、初日にはほぼ完売します。これら一連の事実を顧みると、正義の風景画への特別な想いを改めて想起できます。

正義の初期の風景画は、身近なものを題材に、写実的に、緻密に、構成的に、理知的に作画されています。《斜陽》には動と静、時間、などを巧みに取り込み、それを意識させずに、見る人を取りこにする。これら初期の風景画が一変するのは、正義が一采社に加わった1950年以降です。

正義は、山本丘人・高山辰雄の作画態度に共感し大きな影響を受ける一方、実験を重ねて、制作の本質を会得し、正義独自の風景画に結実します。「一采社展」への出品画の多くが風景画であったことを考えても、彼の風景画の研鑽にいかにも役立ち、効果的だったことか。

対して日展への出品画は、ここ一番という勝負の時以外はそのほとんどが人物画でした。1960年の日本橋・高島屋の個展出品の《桜》(現在所在不明です)などは、みる者が期待する桜の花びらなどカケラもなく、それは寒風に耐え屹立する桜の枝の先端に刷毛で暖色を刷いて、蕾をあらわし、凛とした季節に、近づく春への自らの期待を重ねたものでありました。彼の風景画にかける想いが、素直に伝わってきて、鑑賞するものの魂に、直接作品を託するといった姿勢が感じられ、そこには確信に満ち、自己の主張のままに生きるという強い意思をみてとれます。



《斜陽》1946年 豊橋市美術博物館蔵



《夕陽》1949年 豊橋市民病院蔵



《雪山》1974年 豊橋市美術博物館蔵

* * *

「私は正義の作品の全てが自画像だと断定します。見事な一貫性です。」笹木繁男さんは言い切る。絵の形ではなく、その絵に込められた画家のころまでも読み取るのは中々に難しい。全ての作品を見尽くして、その時の背景を知り尽くすことで違った景色が見えてくるのだろう。中村正義本人はこの世間の評価を一体なんと言うのだろうか。

生誕120年 木村莊八展

— 懐かしい時代、愛しい情景、私の東京 —

5月25日(土)～7月7日(日)
豊橋市美術博物館

主催／豊橋市美術博物館、中日新聞社
企画協力／一般社団法人春陽会

明治23(1893)年、東京日本橋に生まれた木村莊八(きむら・しょうはち)は、白馬会葵橋洋画研究所で出会った岸田劉生らとともにフェウザン会や草土社を結成し、以後大正・昭和を通じて多彩な活動を展開した洋画家です。当初は劉生とともにゴッホやセザンヌの影響のうかがえる作品を描きましたが、大正4(1915)年に結成された草土社では写実的な傾向を示すようになり、やがて大正末期に草土社が解消されると、春陽会に基点を移し、よりのびやかで自由な表現を追求するようになりました。その視点は芝居や浄瑠璃などの文芸描写、ダンスホール、祭礼風景など昭和初期の風俗に注がれ、洒脱なタッチで数多くの作品を残したほか、永井荷風の『濃東綺譚』等の挿絵でも人気を博します。



《壺を持つ女》1915年 愛知県美術館蔵
妻をモデルに描いた草土社時代の代表作。象徴的な青い壺には「To My Wife」と記されている。



《牛肉店帳場》1932年 公益財団法人北野美術館蔵
莊八の生家・牛肉店「いろは」第8支店を回想して描いた作品。莊八の父・莊平は多数の内妻を持ち、店舗の経営にあたらせたという。男女合わせて30人の子をもうけたが、莊八は8男にあたる。絵の奥の帳場に座っている人物が莊八自身。「いろは」は莊平没後急速に衰えた。

西欧の美術を翻訳紹介するグローバルな視野を持ちながらも、愛惜を込めて移り変わる東京の風景を絵画や著作に描きとめ、晩年に著した『東京繁盛記』(没後刊行)では日本芸術院恩賜賞を受賞しました。また、舞台美術や映画の美術考証にもたずさわり、小唄の師匠としても知られるなど、多分野で活躍した文化人でした。

本展は「生粋の東京人」木村莊八の生誕120年を記念してその画業をあらためて回顧するものです。

莊八の目を通して活写された懐かしき東京の情景をぜひご覧下さい。



《永井荷風著『濃東綺譚』挿絵08》1937年 東京国立近代美術館蔵
玉の井の私娼窟を舞台とする永井荷風の連載小説挿絵。莊八は「オノレのウヰメイは、これで極まった」と、徹底した取材と考証を重ねて下町情緒を描き出し、高い評価を得た。

- ◆記念講演会「木村莊八ーわたしは東京を呼吸して生きてゐる」
田中 淳(東京文化財研究所企画情報部長) 6月1日(土) 午後2時～ 講義室
- ◆美術講座「木村莊八ーフェウザン会・草土社から春陽会までー」
金原宏行(豊橋市美術博物館館長) 6月16日(日) 午後2時～ 講義室
- ◆8のつく日ギャラリートーク(本展担当学芸員) 5月28日(火)・6月8日(土)・18日(火)・28日(金) 各日午後2時～

館蔵浮世絵展 旅人、川を渡る ～橋・渡船・徒渡し～^{かち}

4月27日(土)～6月16日(日) * 4/29(月・祝)・5/6(月・祝)は開館し、5/7(火)は休館

豊橋市二川宿本陣資料館

東海道は、江戸時代には江戸と京・大坂を結ぶ最も重要な街道であり、参勤交代の大名や幕府の役人、商人、社寺参詣・物見遊山の庶民など、多くの旅人で賑わいました。しかし、主に沿岸の平野部を通る東海道を旅するためには、いくつもの大きな川を渡らなければなりません。

ところが、東海道では、幕府の政策や技術的な問題により、大きな川に架けられた橋は吉田大橋・矢作橋・瀬田橋の3ヶ所しかありませんでした。そのため、六郷川・馬入川・富士川・天竜川などでは渡船、酒匂川・興津川・安倍川・大井川などでは川越し人足による徒渡しによって川を渡っていました。

このように、旅人が川を渡る光景は、東海道において欠くことのできない題材であり、歌川広重をはじめとする多くの浮世絵師によって描かれてきました。

この展覧会では、当館が所蔵する浮世絵の中から、様々な方法で川を渡る旅人の姿が描かれた作品を紹介します。



三代 歌川豊国〈大井川往来之図〉

おでかけになりませんか？ -春の展覧会案内-

展覧会名	会場	会期
上村松園展	名古屋市美術館	4/20(土)～6/2(日)
「松村公嗣 いのちの輝き」展	古川美術館	5/19(日)まで
ドラマチック大陸 風景でたどるアメリカ	名古屋ボストン美術館	5/6(月・祝)まで
アニメ化40周年 ルパン三世展	松坂屋美術館	4/27(土)～5/21(日)
杉山寧展 - 悠久の刻を求めて -	松坂屋美術館	6/15(土)～7/21(日)
草間彌生 永遠の永遠の永遠	静岡県立美術館	4/13(土)～6/23(日)

平成25年度 総会を開催します

会員ならどなたでも参加いただけます。お気軽にご出席ください。

日時＝平成25年5月18日(土)午後1時30分～

場所＝美術博物館 講義室

(内容) 役員の改選、平成24年度決算、平成25年度予算・事業など

《総会記念講演会》 総会終了後 午後2時00分～ (予定)

講師＝青柳恵介 先生(古美術評論家)

演題＝「白洲正子の愛した日本の古美術」



青柳恵介(あおやぎけいすけ)先生プロフィール

1950年東京生まれ。1973年成城大学文芸学部卒業。1978年成城大学大学院文学研究科博士課程修了(国文学専攻)。1978年より成城学園教育研究所勤務、現在に至る。若き日より古美術、骨董に関心を持ち古美術関係のエッセイを美術雑誌に寄稿する。著書に、『骨董屋という仕事』(平凡社)、『民芸買物紀行』(新潮社)、『風の男白洲次郎』(新潮社)、『柳孝 骨董一代』(新潮社)など。

会員更新手続きをお願いいたします！

平成25年度の会員更新を受け付けています。25年度も、友の会美術講座・ミニコンサート・研修旅行などの開催や、ホームページの充実など、会員の皆さんに楽しんでいただける企画を予定しています。

まだお済みでない方は、お早目に会員更新手続きをお願いいたします。

※下記のいずれかの方法により会費をお支払いください。

- ①美術博物館……窓口にて会費をお支払いください
- ②郵便局………払込票をご利用ください(送付済)
(手数料無料)
- ③銀行………下記口座へお振込みください(手数料有料)
三菱東京UFJ銀行 豊橋支店
普通 4806768
口座名/豊橋市美術博物館友の会



東松照明(廣園)

25年度会員証

秋の研修旅行アンケートの声

昨年秋の研修旅行で飯田市美術博物館と川本喜八郎人形美術館、光前寺を訪れました。

アンケートから参加者の声をご紹介します。

- ・人形劇に使われている人形が、こんなに繊細に作られているとは知らなかった。こんなすばらしい芸術を教えてください。くれて大変うれしく思う。
- ・光前寺の紅葉の美しさが一番印象的でしたが、飯田市美術博物館、人形美術館ともによかったです。また桜の季節に訪れたいです。
- ・昼食の松島亭、古民家を改装したレストランでお料理も美味しく、お出迎えとお見送り、アットホームな感じのするお店でした。



飯田市美術博物館にて 2012.11.10

収蔵品紹介

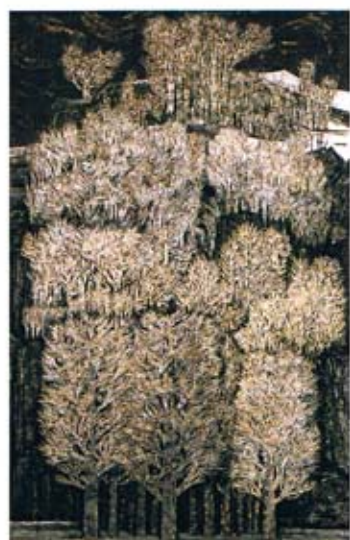
平川 敏夫 ●HIRAKAWA, Toshio

〔吾妻樹叢〕

1961年 紙本着彩 211.7cm×135.8cm 第25回新制作展出品 2012年度購入

〔樹峨〕

1963年 紙本着彩 178.0cm×270.0cm 第27回新制作展出品 2012年度購入



〔吾妻樹叢〕

両作品とも平川敏夫の代表作。1990年に当館で、あるいは1997年の岐阜県美術館での回顧展で目にされた方もいらっしゃるでしょう。

共に樹林を題材に選び、《吾妻樹叢》は垂直方向、《樹峨》は水平方面への広がり意識されています。制作年にして僅か2年の隔たりしかありませんが、木々の描写に大きな違いが見られます。1953年に襲った台風13号による甚大な被害から再生する木々を目にして感じた生命の息吹への賛歌、1961年の中村正義との洋行を経ての日本志向、さらには三河に留まって制作活動を続ける決意—平川の画業展開を考える上で重要な転換期に描かれた作品群です。

今年度は新規収蔵作品に大変恵まれました。平川敏夫は当館を代表する収蔵作家の一人であり、既に50件以上収蔵していますが、初期・晩期のコレクションが充実している反面、中期(1960～70年代)は手薄な状況でした。画業を代表する'60年代前半作2点の収蔵が叶い、今後はより充実した展示ができるようになります。



〔樹峨〕

両者とも対となる作品があり、《吾妻樹叢》が《峨々凍林》(1988年度購入)、《樹峨》が《樹淵》(2004年度寄贈)ですが、4点全てが館藏品となったことで、比較展示も可能です。

6月16日(日)まで「新」収蔵品展にて公開します。ぜひご覧下さい。

(豊橋市美術博物館学芸員 細田樹里)

編集後記

私には臨死体験がある。20歳の頃、スピードを出しすぎてコーナーを回りきれなかった私の車は土手から宙を飛んだ。その瞬間、スローモーションに切り替わった。今まで体験した様々な光景がゆっくり目の前に浮かんで来る。カシャ、カシャとスライドのように場面が切り替わる。走馬灯のようにとはこういうことを言うのかと、そのとき気がついた。車はゆっくり1回転、又1回転してガシャンと止まった。窓ガラスが粉々に砕けて降り注ぐ。時間が元に戻った。車は全損だったががすり傷一つなかった。

そうか、人は最後にこういう光景をみることになるのか。心のボタンを押してくれた光景だけが、走馬灯のように浮かび上がるのか。絵の前で立ち尽くしたことがどれだけあったらうか。涙を流した映画は何本だったらうか。胸を熱くしたオペラと音楽は何時のことだったらうか。

美術博物館の役割は人生に関わる重大事だと思います。「風伯」の編集は心ときめくことでした。議論し甲斐のある人達に恵まれて幸せでした。

(鈴木伊能勢)

【表紙作品】

木村莊八 明治26年—昭和33年

《壺を持つ女》(部分)

油彩・カンヴァス 大正4年 81.7cm×60.4cm 愛知県美術館蔵

豊橋市美術博物館 友の会だより「風伯」第85号

編集・発行 豊橋市美術博物館友の会

会長 宮田正人

編集長 鈴木伊能勢

編集委員 神野能生子 福島陽子 鈴木冷子

協力 豊橋市美術博物館

〒440-0801 豊橋市今橋町3-1 TEL.0532-51-2882

平成25年3月31日発行